社会通念と外国人への対応に焦点をあてた異文化間ソーシャルスキル学習
—在日留学生を対象とした個別セッションの試み—

中　野　祥　子
田　中　共　子

要旨

本研究では，在日留学生を対象に「目上の人との接し方」および「外国人に不慣れな日本人との接し方」に焦点を当てたソーシャルスキル学習を試み，その効果を検証した。その結果，ロールプレイを用いた練習により，行動レパートリーの拡充と日本人との交流意欲の高まりがみられた。スキル学習から１ヶ月後のフォローアップ調査では，学習したスキルの現実場面での実践や文化学習への動機づけの向上が確認できた。異文化適応支援としてのソーシャルスキル学習の効果が示唆された。

キーワード

異文化間ソーシャルスキル学習，留学生，ロールプレイ，社会通念，外国人への対応

1 はじめに

1.1 異文化間ソーシャルスキル学習

異文化間ソーシャルスキル学習は，ロールプレイを用いた認知行動的な文化学習である（白土・田中，2016）。具体的には，異文化滞在者が自身の興味・関心に基づいて，ホスト社会の社会文化的文脈における行動のパターンと文化的背景を知り，模擬的な場面で練習を行って，異文化圏における行動レパートリーの拡充を目指すという，心理教育の形をとった異文化間教育である。例えば，日本人の間接的なコミュニケーションの在り方に焦点を当て，在日留学生を対象に，間接表現を用いながら意見を述べる練習をしてみたトレーニングなどがある（Nakano，Tanaka & Mikushi，2023）。異文化間ソーシャルスキル学習は，文化圏ごとに異なる対人行動の要領や流儀を会得することで，対人関係形成を促進する意図から開発されてきた。文化的に望ましい行動の正解を押しつけるのではなく，社会的場面で機能する行動を知って意図することを的確に伝え，誤解を避ける方法を学んでもらうことに重点を置いている。現実場面においては，獲得した社会的行動をいつ，どのように適用するかは主体的な判断に基づくが，行動の選択肢が増えることから，異文化圏における行動の自由を増すものといえる。加えて，実施された文化行動の解釈や文化文法の理解，遭遇した場面の社会文化的文脈の読み取り，異文化葛藤の解消，社会的有能性の場面選択的な発揮などが付随することで，社会文化的適応に資することが期待される。

学習の適用対象は次第に広がり，ゲストとなる在日外国人留学生の文化学習や，在外日本人の異文化適応支援として用いられるほか，ホスト向けの異文化間教育への適用例もある（中野・田中，2018）。在日留学生が日本人との対人関係において感じる困難は，実際の

ところ多岐にわたっている（田中，1991）。田中・藤原（1992）は，在日留学生の対人行動上の困難は，1)感情や機嫌を損ねずに調和を保つ工夫としての表現の間接性，2)礼儀や社会の通念としての行動，3)抑制のきいた自己表現，4)異性との関わり，5)日本人による外国人の特別扱い，６）集団主義的な行動と同一性の尊重，の６領域に渡ることを報告している。しかしこれまでの異文間ソーシャルスキル学習の題材のレパートリーは，まだこれらの領域を網羅しているとは言えず，多様な場面を想定したスキル学習の教材作成と実践が望まれる。

1.2 本研究の目的

本稿では，在日留学生を対象にした異文化間ソーシャルスキル学習セッションを試み，その効果を検討する。ソーシャルスキル学習の内容は，在日外国人留学生の対人行動上の困難として抽出された６分野（田中・藤原，1992；田中・中島，2006）のうち，研究上未着手の３分野（社会通念，外国人への対応，集団主義）に焦点を当てて構成する。

本研究は，研究１（予備調査），研究２（学習セッション），研究３（フォローアップ調査）の３段階で構成される。研究１（予備調査）では，ソーシャルスキル学習として扱う困難場面の選定を行う。研究２（学習セッション）では，研究１で選定した困難場面を用いたソーシャルスキル学習セッションを実施し，その効果を検討する。研究３（フォローアップ調査）では，ソーシャルスキル学習セッションの現実場面における効果を把握するため，一ヶ月後に追跡調査を行い，学習したソーシャルスキルの実際の使用や日本文化への見方，異文化交流に関する認識について尋ね，その変化をみた。

2 研究１：予備調査

2.1 調査対象者

地方国立Ａ大学の在日留学生19名を対象とした。調査対象者の性別は，男性７名，女性12名，年齢はM = 23.4歳（SD = 2.3），出身地域は，東アジア17名，東南アジア１名，西アジア１名である。滞日期間は M = 31.6 ヵ月（SD = 23.5）で，日本語力は初級１名，中級３名，上級15名であった。

2. 2　手続き

留め置き法による自由記述式の質問紙調査を行った。田中・藤原（1992）および田中・中島（2006）をもとに，在日留学生が日本で生活する上で困難を感じやすい主題３つ（社会通念，外国人への対応，集団主義）を表す例を３つずつ挙げた。それらの事例について自らの困難体験があればその具体例と，そのときどう感じたかを記述してもらった。

2. 3　分析

記述された内容について，質的内容分析を用いて，内容のまとまりごとに何をどう感じているかを分類していった。この後に続くソーシャルスキル学習の題材選定のため，文化的差異を感じた出来事についてどう捉えているか（肯定的か，否定的か），対応や振る舞いを難しいと感じているかどうかに留意しながら整理した。

2.4　結果と考察

１つ目の主題「社会通念」に関する困難体験は，1)初対面の人への挨拶，2)割り勘，3)目上の人への敬意表現，について記述されていた。初対面の人への挨拶では，丁寧すぎる挨拶に戸惑いを感じた経験が記される一方で，日本特有の文化的行動として肯定的に捉えられている例もあった。目上の方への振る舞いに関して，東アジアの学生は，頭で理解できるとしつつも，日本語の敬語や日本式の振る舞いを実践するのは難しいと捉えていた。割り勘に関しては，不公平さや冷たさを感じる

こと，抵抗感を覚えること，理解しづらいことが記されていた。

２つ目の主題「外国人に対する日本人の行動」に関しては，1)外国人回避，2) プライベートな質問，3)国や民族への先入観，に関する記述が見られた。日本人は，こちらが外国人だとわかると近づいてこない，という体験談が主に記されていた。英語を学びたい日本人は英語圏の留学生には興味を持つものの，本研究の対象者であるアジア出身の学生には興味を持っていないとの見解が述べられていた。日本人の消極性には，冷たさを感じていた。西村（2000）によると，日本人の外国人に対する距離を置いた付き合いに関しては，多くの留学生が戸惑いや困難を感じているという。今回も半数以上の調査対象者が，日本人から国や民族に対する先入観に基づいた質問をされることに不快感を覚えており，またその返答に困ったという体験を記していた。一方で，先入観に基づいた話をするのは日本人に限ったことではない，と理解を示す記述もあった。

３つ目の主題「集団主義に基づく日本人の行動」については，日本人による，1)同調行動，２）周囲への確認，3)逸脱行動の回避，に関する記述がみられた。本研究の在日留学生は，日本人が皆で同じ行動をすることや，何かをするときに先生や周囲に確認をとってから行動をすること，他人と異なる行動を極力控えることを日本の文化的特徴と捉えていた。こういった出来事を自らの経験談，観察結果として記述するものの，それに対する否定的感情や困難感，対応の難しさについてはほとんど言及されていなかった。これは今回の調査対象者がアジア出身の学生であるため，集団主義に対する文化間距離が比較的近く，違和感が少ないためかもしれない。

以上の結果から，３つ目の主題「集団主義に基づく日本人の行動」は，困難感が目立たないため，今回のソーシャルスキル学習の課題場面から外した。続く学習セッションでは，不快感や戸惑い，対処行動の難しさがより感じられていた２つの主題から，「目上の人との接し方（社会通念）」および「外国人に不慣れな日本人との接し方（外国人への対応）」を課題場面に取り上げることとした。

3 研究２：学習セッション

3.1 調査対象者

ソーシャルスキル学習セッションへの参加を希望し，研究協力に承諾した，地方国立Ａ大学の在日留学生15名である（表１）。男性31名，女性12名で，年齢は，*M* = 23.2歳（*SD* = 2.17）である。出身地域は，東アジア17名，東南アジア１名，西アジア１名，滞日期間はM = 25.4ヵ月（*SD* = 28.8），日本語力は中級２名，上級17名である。

表1 調査対象者の概要

	年齢	所属	学年	出身	日本語学習歴（ヶ月）	日本語力	日本語使用割合	日本人会話割合	日本語使用/日	滞在期間（ヶ月）	アルバイト	サークル
a	22	理	2	韓国	30	上級	70%	30%	2時間	26	ある	ある
b	19	文	1	韓国	30	上級	70%	70%	0時間	18	ある	ある
c	27	経	3	中国	24	上級	95%	90%	7時間	68	ある	ない
d	22	文	研究生	南アジア	34	上級	75%	60%	5時間	2	ない	ある
e	22	文	4	東南アジア	48	上級	40%	30%	2時間	2	ない	ある
f	22	文	1	中国	34	中級	40%	20%	2時間	32	ある	ない
g	26	文	4	中国	91	上級	40%	30%	5時間	91	ある	ない
h	24	文	4	中国	64	上級	70%	70%	3~5時間	62	ある	ない
i	21	文	4	韓国	33	中級	50%	30%	3時間	2	ある	ない
j	25	社文研	1	中国	63	上級	30%	30%	6時間	2	ある	ない
k	27	社文研	3	中国	87	上級	18%	20%	2時間	2	ない	ない
l	22	経	4	中国	72	上級	40%	50%	5時間	56	ある	ない
m	23	社文研	2	中国	63	上級	30%	30%	2時間	2	ない	ない
n	23	社文研	1	中国	62	上級	40%	30%	4時間	14	ある	ない
o	23	社文研	1	中国	62	上級	55%	50%	3~4時間	2	ない	ない
AVE	23.2				53.1					25.4		
SD	2.17				20.80					28.82		

3. 2　手続き

在日留学生が戸惑いを感じやすい日本の文化的行動を題材にしたソーシャルスキル学習セッションを行った。セッションは，一人約50分間とし，個別に実施した。ソーシャルスキル学習の実施方法は小集団方式など様々であるが，今回は個人の日本語力やニーズに対応しやすい個人単位の学習を採用した。セッ

ションは基本的には日本語で行い，適宜対象者に合わせて英語を用いた。課題場面は，予備調査とした研究１の結果をもとに選定した２題，1)目上の人との接し方（社会通念），2)外国人に不慣れな日本人との接し方（外国人への対応），について設定した。

学習の流れは以下の通りである；1) セッションの説明，2)課題場面の説明と学習方法の教示，3)ロールプレイ１回目，4)フィードバック１回目，5)日本の文化的行動に関する解説，6)ロールプレイ２回目，7)フィードバック２回目，8)自己評定（パフォーマンスおよび学習による意識の変化を５件法で評定）。ロールプレイはビデオで撮影し，ビデオ記録を再生しながらフィードバックを行った。セッションの前後に日本における対人行動に関する自己評定をしてもらった。さらに，セッション後には感想などを尋ねる５分程度のインタビューを行った。パフォーマンスについては，ロールプレイを録画し，日本人大学生に評価してもらった。

3. 3　測定と分析

3.3.1 日本における対人行動に関する前後評定

学習セッション前後に，日本の対人行動に関する意識や理解，自らの振る舞いに対する自信等を問う９つの質問項目（表２）に対して「1.全くそう思わない」から「5.非常にそう思う」の５件法で回答してもらった。

3.3.2　セッション後の自己評定

課題１，課題２の各セッション後に自らのロールプレイにおける振る舞い（以下，パフォーマンス）に対する自己評定と，スキル学習後の意識の変化についての質問（16項目）に「1.全くそう思わない」から「5.非常にそう思う」の５件法で回答してもらった。

3.3.3　インタビュー

ソーシャルスキル学習を終えた後，５分程度のインタビューを行い，以下の６点について尋ねた。1)セッション前に初対面の目上の人と接した経験があるか。あった場合はどのような印象を受けたか。2)セッションを受けてみて，初対面の目上の人と接することへの気持ちに変化はあったか。3)セッション前に，外国人に不慣れな日本人と接した経験があったか。あった場合はどのような印象を受けたか。4)セッションを受けてみて外国人に不慣れな日本人と接することへの気持ちに変化があったか。5)セッションを受けた感想。

3.3.4　他者評定

各セッションの１回目と２回目のロールプレイにおける参加者のパフォーマンスのビデオ記録を日本人大学生８名（女性８名，平均年齢 21.75 歳，SD = 0.43)に見せ，評定してもらった。パフォーマンスの細部について問うミクロ項目の５項目と，パフォーマンス全体の印象を問うマクロ項目の５項目に対して，「1.全くあてはまらない」から「5.非常にあてはまる」の５件法で評定してもらった。

3.3 結果と考察

3.3.1 日本における対人行動に関する前後評定

セッション前後における，日本の対人行動に関する意識や理解の変化を表２に示す。矢印は前後の増減を示している。セッション後に最も評定が高まったのは，「(7) 日本人とうまく交流できる自信がある」という項目で，15名中10名（66.7%）が自信の向上を感じていた。次は「(3) 日本文化の文化的特徴に関わる対応の仕方が習得できている」という項目で，９名（60.0%）がスキル習得の実感を高めていた。具体的な対応のスキルを習得したことで，日本人との交流の自信が高まったと考えられる。反対に，セッション前後であまり変化がなかった項目は，「(5) 大学内に

限らず，たくさんの日本人と交流したい」と「(9) 日本人と深い付き合いをしたい」で，２名（13.3%）は向上したと評価したものの，残りの13名（86.7%）に変化はなかった。なお，交流の広がりや交流の深まりへの期待に変化はみられなかった。

3.3.2　パフォーマンスの自己評価

課題場面１「目上の人との接し方」について，比較的高い評定がみられたのは，「声の調子や表情は適切だった」，「仕草は適切だった」，「目上の人と接することへの不安が軽減された」，「日本人の目上の人との接し方を奇妙だと思わなくなった」，である（表３）。

課題場面２「外国人に不慣れな日本人との接し方」について，比較的高い評定が得られたのは，「声の調子や表情は適切だった」，「初対面の相手への距離感は適切だった」，「日本人に話しかけることへの自信が高まった」，「日本人との会話の始め方に関心が高まった」，などである（表４）。

3.3.3　セッション後のインタビュー

課題場面１の初対面の目上の人との接し方については，「*共通点を見つけたり，互いの出身について話すといいことがわかった*」，「*礼儀正しい動作の基本がわかった*」など具体的なスキルの習得について語られた。課題場面２の外国人に不慣れな日本人への対応については，「*外国人と話したくないのではなく，話せないだけなんだと知って日本人が怖くなくなった*」，「*日本人は冷たいわけではないことがわかって安心した*」など，日本人への見方の変化が語られた。

セッション全体への感想として，「*セッションは役に立った*」，「*新たな気付きがあった*」，「*楽しかった。面白かった*」，「*注意すべきことがわかった*」，「*日本語のテキストの通りにやってみたが，見るのと実際やるのでは違った*」，「*今後に使えそう*」，「*日本人と仲良くなりたいと思った*」，「*自信がついた*」など，セッションで扱ったスキルの有用さや楽しさ，日本人との交流意欲の高まりが語られた。

3.3.4　日本人による他者評定

日本人によるパフォーマンスに対する評価で１回目より２回目のロールプレイの評価の合計スコアが高かった項目は，以下の通り。場面１（初対面の目上の人との接し方）では，「確信・自信を持って受け答えしていた」，「受け答えが自然であった」，「態度に好感が持てた」であった。場面２（外国人に不慣れな日本人への対応）では，「確信・自信を持って受け答えしていた」，「会話の始め方が自然だった」，「話題が適切だった」であった。ロールプレイでの練習とファシリテーターによる解説を通じて，振る舞いの自然さ，適切な行動が身についたと受け止められていたことがわかる。これは，参加者によるインタビューにおける「初対面での適切な話題の選び方がわかった」，「自信がついた」，「緊張がなくなった」というコメントにも反映されており，この点で本人の自覚とも重なる。

表２　日本における対人行動に関する前後評定

	実験協力者																	
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	↑	→	↓
(1)日本文化の特徴にうまく対応する方法が具体的に分かっている	→	↓	↑	→	↑	→	↑	→	→	↑	↑	↑	→	↑	→	7	7	1
(2)日本文化独特のやり方を、自分でも一部使いこなせる	→	↓	↑	→	↑	→	↑	→	↑	↑	↓	→	→	→	→	5	8	2
(3)日本文化の文化的特徴にかかわる対応の仕方が習得できている	↑	↑	↑	→	→	↑	↑	→	↑	→	→	→	↑	↑	↑	9	6	0
(4)日本文化の考え方を的確に理解し、戸惑わずに適切な対応ができる	→	↑	→	↑	→	→	→	↑	↓	↑	↓	↑	→	↑	→	6	7	2
(5)大学内に限らず、たくさんの日本人と交流したい	→	↑	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	↑	2	13	0
(6)会話ができる日本人がたくさんいる	→	↑	→	↓	→	↑	→	→	→	↑	↓	→	↓	→	→	3	9	3
(7)日本人とうまく交流できる自信がある	↑	→	↑	↑	↑	→	→	→	↑	↑	→	↑	↑	↑	↑	10	5	0
(8)私にとって、日本人との交流は難しい	↓	↑	↓	→	→	↑	↓	→	→	↑	→	↓	↑	↑	↑	6	5	4
(9)日本人と深い付き合いをしたい	→	↑	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	↑	2	13	0
↑	2	6	4	2	3	3	3	1	3	6	1	3	3	5	5			
→	7	1	4	6	6	6	5	8	5	3	5	5	5	4	4			
↓	0	2	1	1	0	0	1	0	1	0	3	1	1	0	0			

表3 「目上の人への接し方」場面に関する自己評定

	実験協力者																
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	*AVE*	*SD*
(1)初対面のあいさつができた	2	2	1	2	1	2	2	2	1	2	2	2	2	1	2	1.7	0.4
(2)言葉づかいは適切だった	2	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	3	2.1	0.4
(3)相手を不快にさせないよう配慮をした	2	2	2	2	1	1	2	2	2	3	2	2	2	1	2	1.9	0.5
(4)自分の印象が悪くならないよう配慮をした	2	2	2	3	1	2	2	2	2	3	2	1	2	1	2	1.9	0.6
(5)声の調子や表情は適切だった	3	2	2	2	1	3	2	2	2	3	3	2	2	3	3	2.3	0.6
(6)うなずいたり、「はい」とあいづちを打った	1	2	1	3	2	2	2	2	2	4	1	1	2	1	2	1.9	0.8
(7)仕草は適切だった	3	2	2	2	1	3	2	2	2	4	2	1	1	2	2	2.1	0.8
(8)目上の人と接することへの不安が軽減された	4	2	2	4	1	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2.5	0.8
(9)目上の人と接することへの自信が高まった	4	2	2	2	1	1	3	3	3	3	2	3	1	2	2	2.3	0.9
(10)目上の人との接し方を知ることができて面白かった	3	2	2	2	1	2	2	2	2	1	3	2	1	1	1	1.8	0.7
(11)日本人の、目上の人に敬意を払う理由がわかった	3	2	2	2	1	3	2	2	3	2	2	4	1	1	2	2.1	0.8
(12)目上の人への接し方を実感できた	2	2	1	2	1	1	3	2	2	2	2	2	2	2	2	1.9	0.5
(13)日本人の、目上の人との接し方を奇妙だと思わなくなった	5	2	2	3	2	3	3	3	3	3	2	1	1	1	3	2.5	1.0
(14)日本人の、目上の人との接し方に関心が高まった	4	2	3	2	1	1	2	2	3	2	2	2	1	2	2	2.1	0.8
(15)日本人の、目上の人との接し方を他にも知ってみたい	2	2	2	2	1	1	2	2	3	1	4	2	1	1	1	1.8	0.8
(16)日本人の、目上の人との独特な接し方を使ってみたい	2	2	2	2	1	3	2	2	2	2	4	3	1	1	1	2.0	0.8
AVE	2.8	2.0	1.8	2.3	1.2	2.1	2.3	2.2	2.3	2.5	2.3	2.0	1.6	1.5	2.0		
SD	1.0	0.0	0.5	0.6	0.4	0.8	0.4	0.4	0.6	0.9	0.8	0.8	0.6	0.6	0.6		

表 4　「外国人不慣れ」場面に関する自己評定

	実験協力者																
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	*AVE*	*SD*
(1)自然に会話をはじめることができた	2	2	2	2	1	1	3	2	1	2	2	1	1	1	3	1.7	0.7
(2)話題選びは適切だった	2	2	2	3	1	2	2	2	1	2	4	2	1	1	2	1.9	0.8
(3)相手を不快にさせないよう配慮をした	2	2	2	3	1	1	2	2	2	3	2	1	1	1	2	1.8	0.7
(4)自分の印象が悪くならないよう配慮をした	2	2	2	2	1	2	2	2	2	3	4	2	1	1	2	2.0	0.7
(5)声の調子や表情は適切だった	2	2	3	2	1	3	2	2	2	4	4	2	2	2	3	2.4	0.8
(6)相手の話にうなずいたり、あいづちを打った	2	2	1	2	3	1	2	2	2	4	2	2	2	1	2	2.0	0.7
(7)初対面の相手に対する距離感が適切だった	3	2	2	2	2	2	3	2	2	4	2	3	2	2	2	2.3	0.6
(8)日本人に話しかけることへの不安が軽減された	3	2	2	3	1	1	2	2	2	2	2	2	1	1	2	1.9	0.6
(9)日本人に話しかけることへの自信が高まった	3	3	2	3	1	1	2	2	3	3	4	2	1	1	2	2.2	0.9
(10)日本人との会話のはじめ方を知ることができて面白かった	3	2	1	2	1	1	2	2	1	2	2	1	1	1	2	1.6	0.6
(11)日本人がなかなか外国人に近づいてこない理由がわかった	3	2	1	2	1	2	2	2	2	1	4	1	1	1	2	1.8	0.8
(12)日本人との会話のはじめ方を実感できた	2	2	2	2	1	1	2	2	2	2	3	1	1	1	3	1.8	0.7
(13)日本人との会話のはじめ方に戸惑いがなくなった	2	3	2	2	1	2	2	2	2	3	2	2	1	1	3	2.0	0.6
(14)日本人との会話のはじめ方に関心が高まった	3	2	3	2	2	1	2	2	2	2	4	2	1	1	1	2.0	0.8
(15)日本人の、会話のはじめ方を他にも知ってみたい	2	1	3	1	1	1	2	2	2	1	4	2	1	1	1	1.7	0.9
(16)日本人との、会話の独特なはじめ方を使ってみたい	2	1	3	1	1	1	3	2	2	1	4	2	1	1	1	1.7	0.9
AVE	2.4	2.0	2.1	2.1	1.3	1.4	2.2	2.0	1.9	2.4	3.1	1.8	1.2	1.1	2.1		
SD	0.5	0.5	0.7	0.6	0.6	0.6	0.4	0.0	0.5	1.0	1.0	0.6	0.4	0.3	0.7		

4 研究３：フォローアップ調査

4.1 調査対象者

研究２（学習セッション）に参加した者のうち，協力の得られた９名が追跡調査に参加した。彼らの出身地域は，東アジア７名，東南アジア１名，南アジア１名で，日本語力は上級７名，中級２名である。この９名は表１のインフォーマント記号ｄ，ｅ，ｆ，ｉ，ｋ，ｌ，ｍ，ｎ，ｏと対応している。

4. 2　手続き

ソーシャルスキル学習セッションの１ヶ月後に，フォローアップのための質問紙調査および面接調査を行った。質問紙調査では，日本文化に対する態度の変化を知るため，セッション後の１ヶ月で日本人と交流する際に気をつけるようになったことや，日本人と交流することに対する気持ちや態度の変化を問う質問（10項目）を示して回答を求めた。「1.全くあてはまらない」から「5.非常にあてはまる」の５件法で回答してもらった。

面接調査では，セッションで学習した課題場面と類似した場面に実際に遭遇したかどうか，および異文化に対して気持ちの変化があったどうかなどを尋ねた。インタビューは30分程度行った。

4.3 結果と考察

質問紙への回答をみると，評定が比較的高かった項目は，「日本人の行動をよく観察して日本人的な行動を知ろうとするようになった」（M = 3.4, SD = 0.5），「日本人の行動の仕方について興味が増した」（M = 3.2, SD = 0.4）などであった。総じて日本人と交流することに前向きな回答が得られた。反対に評定の低かった項目は，「日本での行動を難しく感じ，日本人との交流を避けがちになった」（M = 0.7, SD = 0.7）であった。

面接調査では，セッションで学習した要領を使ったとか，以前より日本人に積極的に話しかけるようになった，日本人の行動に興味がわくようになった，疑問があったら自分で日本人に聞いて説明をしてもらうようになったなどと語られ，総じて能動的に日本人と関わるようになった様子がうかがえた。以下の文章の下線部は筆者が注目した箇所であるが，例えば，日本人に自ら話しかけた経験について，ｄさんは「*日本人も外国人と話したいという気持ちがあるけど自信がないのだという理由がわかったから，それを思い出して，自分から話しかけるようになった。自己紹介も少し話をしてから自然なタイミングでできた。*」と語った。セッションでの学びを現実の交流に活かしていたことがわかる。セッション後，異文化に対する気持ちに変化があったかという問いに対しては，「*自分が異文化に溶け込むのが楽しいと思うようになった。周りの人を観察するようになった。（ｆさん）*」や「*異文化に興味が沸くようになり，疑問があったら自分で日本人に聞き，説明をしてもらうようになったので，もっと理解できるようになった。（ｋさん）*」などの語りがあった。異文化間の視座の獲得や積極性の向上が見られたといえる。

5 総合考察

本研究のソーシャルスキル学習セッションでは，認知面と行動面にわたる効果が見られた。認知面では，日本人や日本文化的行動への理解が進み，興味を持つことで交流意欲が高まっていた。行動面では，ロールプレイを通じた成功体験により，対人交流に対する不安が減り，スキルの実践が促されていた。セッションでのフィードバックを通じて，母文化の行動が意図とは異なる解釈をされる可能性や，望まない反応をされるパターンを知り，異文化圏における行動選択の判断に役立つ学習ができていたと考えられる。

セッション１ヶ月後のフォローアップ調査では，認知面において，日本文化への態度が

より肯定的になり，文化学習の動機付けが増していたことが示された。行動面では，学習した異文化間ソーシャルスキルが日本人との実際の交流場面で使われていた。セッション前には持ち合わせていなかった，新たな振る舞いについて学ぶことで，行動レパートリーの拡充と異文化環境における行動選択の自由が増したものと考えられる。異文化間ソーシャルスキル学習は一律の行動を推奨するものではなく，最終判断は本人に委ねられるが，フォローアップインタビューの結果から，学習者が新しく習得したスキルや知識を，意欲的に実践の場で使用してみたことがわかる。さらに，現実場面においても，文化的に気になる行動について日本人に自ら尋ねてみる姿勢がみられた。ほかにも，自文化に影響を受けた自らの振る舞いを振り返ったり，文化的に未知の考え方や行動様式について知りたいという意欲が増していた。以上のことから，認知面・行動面の両面において，異文化適応支援のための異文化間教育としてのソーシャルスキル学習の効果が示唆された。

6 研究の限界と今後の課題

本研究のソーシャルスキル学習には，日本人との対人交流に関する不安を低減させ，日本文化に対する前向きな態度と自然な文化行動の習得を促す効果がみられた。ただし今回は少数の事例研究で端緒を開いたに過ぎない。今後は協力者の数を増やすことで，量的検討によってセッション効果の安定性を確かめていくことができよう。

なお今回の研究協力者は，比較的日本語学習歴が長く，日本語力が上級レベルの者が大半で，日本滞在期間も比較的長かった（M = 25.4ヶ月, SD = 28.8）。そのため，例えば，課題場面1「初対面の目上の人と接する」では，既にスキルを備えていた者もいたと思われる。日本滞在初期でまだ日本文化に十分馴染んでいない者を対象とした，セッションの実施と検討は課題である。さらに，日常生活における日本人との会話の割合や，日本滞在期間，日本でのアルバイトやサークルの経験の有無といった，個人の属性や特徴による学習効果の違いについても検討する必要がある。それがわかれば，適切な時期に適切な課題場面を用いた学習セッションを設定することに繋がり，多様な教育方法の発展と，個人のニーズに応じたプログラムの提供に役立つだろう。最後に，スキル学習で取り扱う題材のレパートリーの拡充も今後の課題である。対象とする者が広がれば，今回取り上げなかった領域の課題場面を練習することにもニーズがあるかもしれない。多様な場面を扱う題材を用意することで，学習参加者の選択の幅が広がり，より豊かな教育が提供できるだろう。

（教育・学生支援機構留学生センター　講師）
（岡山大学大学院社会文化科学学域　教授）

【引用文献】

(1) 中野祥子・田中共子，2018，「日本人学生を対象としたムスリム文化アシミレーターを用いた異文化間教育の試み―異文化間ソーシャルスキルの視点から―」『異文化間教育』第48号146-160.
(2) Nakano,S.,Tanaka,T. and Mikushi,K., 2023, IAFOR Journal of Psychology & the Behavioral Sciences, Volume 8, Issue 2, 19-35. https://doi.org/10.22492/ijpbs.8.2.02（最終閲覧日：2023年3月8日）
(3) 西村厚子，2000，「帰国子女・外国人留学生―葛藤解決への試論―」　『異文化理解の座標軸』　日本図書センター
(4) 白土悟・田中共子，2016，「第三章　外国人留学生の教育」小島勝・白土悟・斎藤ひろみ（編著）『異文化間教育学大系

第一巻　異文化間に学ぶ「ひと」の教育』明石書店，60-82.
(5) 田中共子，1991，「在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル」異文化間教育5，98-110.
(6) 田中共子・藤原武弘，1992，「在日外国人留学生の対人行動上の困難：異文化適応を促進するための日本のソーシャルスキルの検討」『社会心理学研究』第７巻２号，92-101.
(7) 田中共子・中島美奈子，2006，「ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み」　異文化間教育学会編『異文化間教育』第24号，92-102.

謝辞

１．本研究はJSPS科研費 JP-20530570 の助成を受けました。

２．本研究は中谷真理さんの2012年度岡山大学文学部卒業研究におけるデータを再構成しました。発表のご快諾とご協力に感謝いたします。